

金峰山・瑞牆山 2006.4.22-23 山行記録

金峰山。奥秩父最高峰。奥秩父と聞くと、東京から近いように思えて案外遠かったが、独特の岩が聳え立つ山脈こそが、金峰山ならでわの醍醐味を味わえるのだろう。

4月22日(土)

信濃川上駅から金峰山荘前まで、タクシーで入山(ここまでは林道が整備されている)。タクシードライバーに、金峰山荘前までの料金は事前に5,000円との見積もりをもらっていたと伝えると、なんと5,000円でメーターを止めてくれた!! おそらく、実際には6~7,000円はあったに違いない。ドライバーの長田さん、ありがとう!! (この長田さん、後に私にとって重要人物となるとは、このときの私には知る由もなかった。)

金峰山荘から中ノ沢出合までは沢浴いのなだらかなルート。金峰山荘の水場で水を汲んだが、沢がすぐそばに流れているので水補給は問題なし。距離感を感じるが、沢の音を聞きながら心地よく歩ける。また標高100mごとに目印がついていた。

中ノ沢出合にて、アイゼンを装備する。残雪やアイスバンは、この付近から少しずつ見かけられた。最終水場とされる地点(=沢から離れる地点)は、ようやく雪解けしたような状況で水が汲めなくもない。(しかし、この1週間前なら凍結していたかもしれない。)そして上り坂はだんだん急になってくる。

中間地点。見晴らしがよく、瑞牆山とハヶ岳の眺めがすばらしい。その後はひたすら樹林帯の急登が続く。

急登に疲れきった頃、ようやく見えたのが金峰山小屋。来週のオープンのために、一足早く山小屋スタッフが雪かきやら掃除やらをしていた。また、通常炊事場とされる6畳程度の小屋が、冬期小屋として利用でき、小屋内はテーブルと毛布が用意されていた。しかし、実際は、入口は開かれていたものの、窓は完全に雪で閉ざされていたので、山小屋のスタッフが急遽入口だけ雪かきしてくれたのかもしれない。

ザックを小屋に置き、山頂目指してピストン。小屋からは森林限界を超えるので、瑞牆山もその向こうのハヶ岳も、北アルプスも、南アルプスも、奥秩父連峰も、何もかもがよく見えた。そして山頂。おお。富士山が大きい。五丈岩はとても存在感のある岩だった。金峰山は本当に不思議な形をした岩場が峰を成す山だった。例えるなら、ドラゴンボールで、孫悟空が修行していたような世界??

食事後、山小屋スタッフのご好意で、なんと無料で(!!)泊めていただいた。小屋内にはこたつがありぬくぬくでき、またスタッフの方の趣味(というより暇つぶし!?)のための三味線やダーツなどがあった。いろいろな話を聞き、のんびりとした時間を過ごしたあと…、事件発生。携帯がない…。泣きそうになる…。ううっ……。

4月23日(日)

早朝 3 時半起き。山小屋で用意してもらったふとんでぐっすり眠れた。自炊小屋にて朝食を食べ、いざ出発。5 時では十分明るい。金峰山山頂をまくルートを歩く予定だったが、ルートを発見できず、山の斜面を突っ切る形で進んだ。しかし、足跡のない斜面を歩くのは気持ちがいいものの、途中から雪質が軟らかくなり、何度となくズボズボと膝まで足が沈んでしまう。結局は稜線まで出て、稜線ルートを歩くことにした。

稜線に近づくと、次第に風は強くなるが、稜線に出た瞬間の気持ちよさといったら…。何もかもを見下ろせる、あの気持ちよさ。しかも、他の登山客はおらず、独占状態!! むふふふ。

ルートは一目でわかるほど足跡で踏み固められ、千代の吹上までも難なく下ることができた。千代の吹上付近は、ここもまた金峰山独特の奇怪な形をした岩が聳え立ち、その間を縫って歩くのもまた楽しい。自然が作り出す技は美しい。千代の吹上を過ぎると、森林限界も終わり、森の中を下山するコースとなる。残雪は所々で残り、大日小屋を過ぎる頃まで続いていた。大日小屋から富士見山荘までは、ごく平坦ともいえる山道をいく。

富士見山荘にてザックを置き、軽身のピストンで瑞牆山へ向かった。体が軽いと、歩行ペースも軽やか♪ 桃太郎岩まで一気に下った後、瑞牆山山頂へ向かうルートは、とにかく休む暇がないほど急登が続く。(桃太郎岩は、岩が真っ二つに割れていたが、なぜ桃太郎なのか、理解に苦しむ…。)

ここまでで出会った登山客に水かき山の残雪状況を聞くと、「山頂付近は雪が残るし、アイゼンはあった方がいい」「アイゼンなしで登った若者たちがいる」等いろいろな話を聞いていたが、私が思うに、絶対にアイゼンは必要!! 登り始めてから 1 時間位もすれば、アイスバンが至る所にあり、やがてアイスバンは濁った残雪に変わり、気がつけばそれなりに積雪のあるルートに変わるのだ。(アイゼンなしで登った若者は、本当にいたのだろうか…?) 山頂付近の鎖場は凍りつき、その岩の左側を回り込むような形で階段状のルートができていた。それを登りややもすれば、ようやく山頂!! しかし、視界は真っ白。噂のどひゅーという景色を見ることはできなかったが、下からも見上げられたとおり、相当の絶壁だったのだろうと思われる。

再び、富士見山荘まで戻り、瑞牆山荘へ下る。瑞牆山荘からはタクシードライバーにゆ一ふる菰崎を紹介してもらう。(ラジウム温泉は低音で、主にがん治療の患者が長湯するためにあるそうで、ぎぶっと温まるには向いていないそうである。) また、このドライバーは金峰山小屋を先代の主人の頃から知っているそうで、先代の主人が亡くなった後、後継者がいない間は地元の人が当番制で小屋を守っていたこと、しかしあるとき、当番の人が何かの手違いで小屋を開けなかったため、その日に予約していた登山客がその場は大弛峠小屋に流れてまるく収まったが、金峰小屋の存続が危ぶまれるようになってしまったこと、そこに後継者として名乗りを上げたのが先代の娘さんの綾子さんだった、とそんなエピソードを聞かせてくれた。綾子さん、そうだったんですね、頑張ってください!!

ゆーふる菰崎で一汗流し、さっぱりしたところで、朗報!! なんと、失くした携帯が見つかった!! 昨日乗ったタクシー会社に忘れていたそうで、タクシー会社が預かってくれているとのことだった。うう、神様、仏様、金峰山様、そして何よりも長田様、本当にありがとうございます!! というわけで、携帯をなくしたことも、また一つ良い思い出となったのであります。

あっという間の2日間だったが、今回も実りある山行だった。正直、金峰山・瑞牆山といえば、初心者が挑戦する山というイメージを持っていたのだが、実際は登りごたえも十分にあり、大自然の偉大さをも感じさせる、魅力的な山だった。金峰山小屋の方にもお世話になったし、また時季をずらして訪れてみたい。

石川暁崇